鹿児島・麦の芽福祉会のとりくみ

ゆりかごから墓場まで 11

青春を謳歌してゆっくり・じっくり自分づくり

～福祉事業型専攻科・大学の初年度のとりくみ

ユーススコラ鹿児島　米衛政光

2017年4月7日、真新しい校舎に19人の新入生を迎えての入学式。オープニングは、麦の芽のなかまたちによるジャンベ演奏。リズムに合わせて思わず身体を動かす新入生。緊張感が少し和らぎます。職員の歓迎メッセージや学生一人ひとりの自己アピールなどを終え、締めくくりはゆずりんの曲「みんな輝け」の職員合唱。期待と不安の入り交じった表情でじっと見つめ聴き入る姿がありました。数日後、悠斗（ゆうと）さんが「学園長は入学式で、ユーススコラは失敗してもいいところです。失敗しても『ドンマイ、ドンマイ』と言ったよね」と、何度も確かめるように話しかけてきました。新しい活動への挑戦に尻込みしがちな学生たちの入学当初の姿を見るにつけ、この学生たちが好きなこと、やりたいことを広げ、自己肯定感を育んで卒業させてやりたい、失敗してもドンマイの学園をみんなで創っていきたいと強く思ったものでした。

■開校は保護者のねがいから

「ユーススコラ鹿児島」は、福祉事業型専攻科・大学として昨年4月に開校しました。

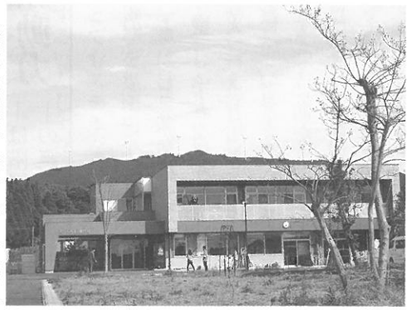
現在、生活介護事業を利用した「ライフプラニングコース」に11人、自立訓練（生活訓練）事業を利用した「セルフマネジメントコース」に9人の、計20人が学んでいます。1年後には、さらに就労移行支援事業も利用する予定で、特別支援学校高等部を卒業する知的障害・発達障害のある青年等が希望すれば〝4年間学べる場〟になります。

同時に開設した、共同生活援助事業を利用した学生寮「パンシオンなないろ」には、離島からの入寮を含む7人の学生が、寮生活をしながら通学してきています。

開校のきっかけは、「特別支援学校高等部までの教育で終わらせることなく、どんな障害があっても、もっとゆっくりと学ばせたい！」「もっと自分探しを続けたり、仲間とのかかわりを通して失敗したり、悩んだりしながら青年期を豊かに膨らませてやりたい！」という、当法人の3つの放課後等デイサービスに通う、まもなく高等部卒業予定の保護者からの声です。

このねがいの実現に向けて、2015年11月、「鹿児島に専攻科をつくる会」が結成されました。全国専攻科（特別ニーズ教育）研究会に参加したり、全国各地の先進的な専攻科・大学を視察したり、和歌山から施設長ら3氏を招いての講演会企画で延べ160人の参加を得たりして、鹿児島における青年期教育のねがいの大きさを確信しながら開校を迎えました。

以下、〝青春を謳歌しながら自分をつくり直している〟2人の学生を紹介します。



▶眺望のよい校舎全景－木をふんだんに使っています

■喪失していた笑顔と言葉を自己開放のなかで回復

里桜（りお）さんは、6月からライフプラニングコースに入学してきた女子学生です。他法人の就労継続支援B型事業所や生活ホームを利用していたのですが、保護者から「特別支援学校時代に見せていた笑顔や、おしゃべりがなくなった。幻覚症状も見られるようになり、精神科医からは『放置していたら統合失調症を患っていたかも』と言われた」と、これまでの経過についての話があり、入学となりました。

学校による進路指導も福祉事業所の訓練的な指導も、里桜さんのキャリア形成のためということだったのでしょうが、強い指示や限界を超える持続性を重視するとりくみのなかで、天真爛漫で素直な里桜さんの人格を傷つけたのだろうと推察されます。入学当時、学生たちの大きな声に過剰に反応して、床にへたりこむPTSD様の行動も時折見られました。

もともと学校が大好きで、特に音楽やダンスが得意だった里桜さんは、2週に1回ある音楽療法士による「芸術」の時間を楽しみにしていて、アイドルが歌う曲などが取り上げられるとクラスの仲間や担任の袖を引っ張って「この曲知ってる、好き」と教えてくれるようになりました。歌手の絢香が歌う「にじいろ」の合唱を10月に法人主催の「みんなみんなフェスタ」で披露したときも、入学当時の不安げな表情ではなく、得意げに堂々と仲間と一緒に歌い上げる姿がありました。

週1回の調理の授業では、クラスの友だちの「チョコレートケーキ、一緒にしよう」との声かけに、にっこり笑顔でうなずき、相手の手をギュッと握ったり、自分から「これ、どうすればいい？」とわからないことを尋ねたりするなど、仲間との交流を楽しみながら心を解きほぐし、自分が出せるようになってきています。仲間と気持ちを通い合わせることができた授業の後は、担任に抱きつきに来て、「たのしい」とつぶやく、そんな特別支援学校時代に見せていた姿が戻りつつあります。

1年余で喪失したものは1年余、あるいは2、3年かけないと完全には取り戻せないのではないかと思いますが、着実に自己回復しつつあるのを感じています。

また、この里桜さんのケースは、あわてて無理を押して就労させようとする特別支援学校の「キャリア教育」の最近のあり方―受け身的態度形成を重視する教育でよいのかという問題も提起しているように思います。

▶〝みんなみんなフェスタ〟で「にじいろ」の全員合唱

■相手の気持ちを尋ねる対話を重ねて自分づくり

悠斗さんは、セルフマネジメントコースの男子学生です。他の人の気持ちを読み取ることが苦手で、入学当初は、ある職員の視線が自分だけに向けられていると勘違いして、「こっち見んな。あっち行けよ！」「ふざけんなよ！」と独り言をつぶやきながらほうきを投げたり、仲間とのトラブルで腹を立て、大きな声を出して対峙し、近くの物に当たったりしていました。そのたびに、担任は「～されて嫌だったんだね」「話し合ってみると悠斗さんの気持ちも伝わるし、相手の気持ちもわかるかもしれないよ」と、悠人さんの気持ちをまず受け止め、自分の気持ちを鎮めながら相手の気持ちを尋ね、探れるように対話することを促してきました。

相手と落ち着いて対話することを重ねるなかで、最近では、「帰りのミーティング」の時間にクラスのみんなに向かって「僕は今日○○くんと喧嘩をしてしまいました。△△と言われて腹が立ったからです。でも、僕も怒り過ぎてしまいました。怒ると自分でも止められなくなります。みんな、僕が怒っているとき、止めてもらえると助かります。もう、喧嘩をしたくないんです」と訴えるようになっています。

自分を「過去」「現在」「未来」にわたって客観的に見つめ、反省して自分をつくり直そうとする悠斗さんの姿に、教室にいるみんながシーンと静まりかえることもあります。こうした場面の繰り返しのなかで、クラスの仲間も「悠斗さんは困ったものだ！」という見方から「悠人さん自身も困ってい